慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治十四年政変と『保古飛呂比』
Sub Title	
Author	渡辺, 俊一(Watanabe, Shunichi)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1999
Jtitle	近代日本研究 Vol.16, (1999.) ,p.189- 219
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19990000-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十六巻（一九九九年）

明治十四年政変と『保古飛呂比』

渡辺俊一

はじめに

明治十四年政変は、日本の近代の方向を決定した重大な事件であった。伊藤博文を中心とする薩長の政治家の主導権が確立し、プロイセンモデルの立憲制度の採用が決定的になったことこそが、この政変の意義であるとされてきた。しかし、私は、拙稿「明治十四年政変再考」[1]において、大隈重信の政府からの追放よりも、福沢諭吉に対する政変後の政府の態度の急変を重視して、むしろ思想方面における変化こそ重視すべきではないかと論じた。その論文の要旨を次に簡単に紹介しておく。

明治十四年の政変は、政府首脳の信頼の厚い官僚の井上毅が、大隈が立憲制度に関する意見書を秘密に天皇に提出したことを利用して、大隈が外部の福沢や民権勢力と結び、政権奪取を図った陰謀であると伊藤博文等の薩

長の政府首脳に中傷した結果起きた事件であった。伊藤博文はこの話を聞き激怒したが、すぐには大隈と決裂することはしなかった。しかし、八月から未曾有の盛り上がりを見せた、開拓使官有物払下げ関する反政府運動が大隈の煽動によるものとされ、福沢も反対運動に関与していたことから、政府首脳は陰謀の実在を信じ込み危機感を高め最終的には大隈を追放し、払い下げの中止と共に、九年後の国会開設を約束した詔勅を出すことによって事件を収束した。

伊藤らの政府首脳の敵意は、民権派と結んだ大隈よりは、それを外部から指嗾したと信じた福沢に向けられた。当初から、福沢の陰謀への関与を強く示唆していた井上毅は、政変後に「人心教導意見[2]」を政府首脳に提出した。その中では、福沢こそ今回の危機を招いた危険な過激思想の元凶であると主張して、その影響力を根絶するためには、彼と反対の方向を取る必要があると、漢学の復興やドイツ学の奨励などの具体的政策と共に、政府の取るべき思想の方向が提案された。その後の政府の思想教育政策は、明らかにこの意見に沿ったものとなった。維新以来の、福沢が外部から支援していた、政府の開明的要素は殆ど姿を消した。この思想方面における、反動革命とも言うべきものこそ、井上毅がこの政変によって目指していたものであった。

私は、前記の論文で以上のように論じた。しかし、六月から七月までの、井上毅の資料に残っている活動を追跡できたにすぎなかった。井上毅の政治家への説得工作の決め手になった「密話」の具体的な内容や、開拓使問題が勃発して政府の危機感が高まり、最終的に大隈の追放にまで至る八月から九月までの決定的な時期の井上毅の活動に関しては、資料がないので状況証拠から憶測するしかなかった。

しかし、そのような表面に現れない井上毅の活動の内容を間接的に示す、重要な傍証となる資料に気がついた。それは政変当時元老院副議長であった佐佐木高行の日記『保古飛呂比』である。佐佐木自身も中正党の首領とし

て、政変では大きな役割を果たした。佐佐木は保守派であるが、その記述は正確で信頼性があり、他の資料と比較しても内容はよく一致している。彼には優れた描写の才能があり、政治家達の短い言葉の引用においても、その状況や人間性を鮮やかに浮かび上がらせている。この書は、明治十四年政変の当事者による同時代の記録として、無比の価値を持っている。

この論文では、最初に『保古飛呂比』における大隈陰謀の記述を紹介する。明治十四年政変とは、大隈陰謀説に対する政府側の対応であったと形容できる。次に、佐佐木に大隈陰謀の情報を提供した元老院書記官であった金子堅太郎の報告を分析して、表面には現れない井上毅の存在を論証する。最後に、この政変における井上毅の行動と構造的類似性を有する、明治二十年の条約改正反対運動における彼の行動を紹介して、この政変における井上毅の役割を明らかにしたいと思う。なお、この論文の主要な資料である『保古飛呂比第十巻』（東京大学出版会）からの引用は、引用部分の後に括弧でページ数のみを示す。

一、『保古飛呂比』における大隈陰謀説

『保古飛呂比』に最初に、政変の原因となった開拓使問題に関する記事が表れるのは、東北巡幸中の天皇を始め政府の主立った政治家が東京を離れている八月であった。八月十三日に掲載の書簡に、新聞が騒いでいると記されている（三四四頁）。佐佐木は当初は、この問題をさほど重視しなかった。けれども、八月二十九日になると、佐佐木は開拓使払下の取り消しに動き、伊藤などの政治家に面会している。その時に、佐佐木は初めて次のような大隈陰謀説を聞くことになる。

扨、伊藤ノ内話ニ、此頃、大隈ノ内意ハ、方今ノ民権論者ヘ同意致シ、只今ノ政府ニテハ、迚モ見込無之トノ趣旨ニテ、極密局外ノ者ト相結ビ候趣、矢野文雄内閣書記官ヘ命ジ、九州地方ヘ巡同ノ砌、其趣旨ヲ被申述タル由、肥後人ヨリ内通アリタリ、是レハ、三菱會社及ビ福澤諭吉ナドト相計リタル事ナリ、實ニ可悪コト、要路ニ居ナガラ、我ガ為ニ密ニ右様ノ手ヲ施シ候事、不安ト也、河野敏鎌モ同趣旨ノ由ナリ、（三五一～二頁）

このような陰謀説に対して、元来進歩派の大隈にも福沢にも好意を持たない保守派の佐佐木は、さして驚きもせずに、大隈は狡猾なのでありそうなことだと感想を記している。

九月十六日には、森山茂が、大隈が福沢と岩崎彌太郎と組んだと陰謀説を紹介（三七一頁）しているが、根拠を示さず風評を報じているだけである。九月十八日の項の、佐佐木の開拓使問題に関する政策提言で、黒田を批判すると同時に次のように論じている。

其反對論者大隈モ、真ニ正義ニ非ズ、私情ヨリ成立チタル論ニテ、三菱會社ノ為メ、第一、一身上ノ為ニ、隠然福澤等ヘ相結ビ、粗暴民権家ノ力ヲ藉リテ、一身ヲ保護スルノ心術ハ、正義ノ者十分心得候事故、伊藤博文等ハ、大ニ憤リ候由（三七四頁）

福沢が粗暴民権家と同一視されていることに注目すべきである。

九月二十四日になると金子堅太郎が訪ねてきて、開拓使問題に憂慮を表明し佐佐木の考えを質したので、佐佐木も同感の意を示し大隈の陰謀について述べると、金子は次のように応じた。

同人モ、其邊ハ十分ニ相心得候ニ付、御同様ニ大ニ困苦心痛セル也ト、近日、僕輩ノ同志岩崎小次郎・三好退藏・島田三郎・田中耕造其他三四名アリ、然ルニ、大隈ノ配下ニテ大蔵省ノ書記官石橋・中島等、吾ガ同志ニ説諭シテ曰ク、最早薩長ノ私論ヲ破ルノ機會来レリ、就テハ、肥前・佐賀ノ者ハ、団結シテ政党ヲ相立テ候手筈ナリ、然ルニ、佐賀而已ニテハ迚モ十分ノ勢力ナキ故、各県ノ同志ヲ相結ビ候筈ナリ、土佐ハ、板垣ヲ頭トシテ一県大體相マトマリ候、九州ヘハ矢野文雄ヲ以テ周旋サセ、又、太政官書記官小野梓モ大ニ盡力ス、是レハ、三菱會社ト能々相結ビ候福澤ノ筋ヨリ、報知社モ結合ノ筈ナリト、（三八三頁）

この金子の報告は、当事者の大隈配下の官僚自身が口にした陰謀の計画を、彼の同志が直接に聞いたという証言である。さらに金子は続けて次のように述べた。

右ハ、全ク方今最モ可恐暴民権家ナルヲ、今般、大隈ヨリ引入レテ、薩長ノ権力ヲ削ルノ策ナリト思考セルヨリ、吾ガ同志ハ、孰レモ同意セズ、中正ヲ蹈ンデ行クノ趣旨也、其ノ訳ハ、開拓使ノ所分モ不可ナリ、又、大隈ノ趣旨モ不可ナリ、其ノ病ハ或ハ大隈ノ方大患ナルベシ、依ツテ、今般一著ヲ失スル時ハ、最早大ニ國體ヲ失ヒ、如何トモ為スコト能ハズト、同志輩丁寧反覆、今日ノ所分ノ至當ヲ求ムルモ、他ニ策ナシ、左大臣ノ宮ニテ、断然御所分而已也、（三八三頁）

として内閣の組織の大改革を提案している。この金子の判断も内閣改革の意見も、佐佐木が常々主張している意見と奇妙なほどに一致している。それ故に、佐佐木も「高行實ニ御同見也」と答えて、すっかり意気投合したのである。

翌二十五日に佐佐木は谷干城と会ったが、谷の所に、金子が同志であると形容した、岩崎と三好の両人が来て、開拓使事件について全く同意見であったと述べた（三九〇頁）。金子等の政治家訪問が、計画的で、組織的な行動であったことを窺わせる。

九月二十六日に、金子は佐佐木に次のように述べた。

河野君ハ、彌大隈参議ノ同腹ト相成リタリ、表面ハ左ノミ顕レズ候へ共、内實ハ十分ノ約束出來タル由、既ニ、島田三郎・三好退蔵両人ハ、河野ト頗ル交際モ厚カリシニ、今般大隈ト同腹トナリタルヲ憤リ、迚モ國事ヲ談ズベキ人物ニ非ズト申居レリ、河野君ノ望ミ既ニ絶ヘタリ、（三九二頁）

金子の大隈陰謀に関する報告は、このような断定的な表現が特徴である。これに続けて、福沢に関しては次のように報じている。

又、福澤ハ、大隈ノ顧問ナレバ、今春カ、國會ヲ速ニ設立ノ建白書ヲ福澤ニ綴ラセタリ、福澤ハ、大隈ヲ籠絡セル心持ニテ、其事ヲ密ニ門下ニ話シタル事アリ、（三九二頁）

大隈の立憲制度の意見書が福沢によるものであり、それこそが、大隈と福沢、さらには大隈と民権派の結託の何よりの証拠であると、当初から井上毅により強調されてきた。金子は、福沢自身がそれを認めたと報告している。そして、陰謀一味の行動を次のように具体的に報告している。

今般、板垣出京ニ付、河野ヨリ島本仲道ニ談ジ、嶋本ヨリ沼間守一・福地源一郎ヘモ計リ、福澤ヨリハ藤田茂吉ヲシテ板垣ニ内談シテ、結合ノ策ヲ立テタル由、尤モ、河野ハ常ニ板垣トハ共ニ成ス見込ナリ、又、三菱會社ヨリ金八千圓ヲ福澤ニ演説費トシテ送リタルニ付、小幡篤次郎北海道等ヘ派出、演説スル由、又、大坂新聞紙モ、内實、三菱會社ヨリ壱萬貳千圓ニ買上ゲタル由、右等皆々、大隈・三菱會社幷福澤等モ相結ビ、地方ノ民権家ヲ団結スルノ策ナル由、右等ノ事情ニ付、其民権家ノ不正ナル事ヲ心得タル者ハ、追々離散スベシ、吾輩モ七八名盟約シテ、純粋ノ民権政治党相立チ候方ヲ、大ニ蓋力ノ筈ナリ、可恐可悪ハ大隈・河野等ナリト云ヘリ、（三九二～三頁）

陰謀の主要人物達が相互に連絡している詳しい様子や、三菱から出る金の流れを具体的金額と共に示して、陰謀が実際に進行中であることを強く印象づけている。

政治家達は、大隈陰謀の実在を完全に信じ込んでいた。同日に佐佐木と会った、長州参議の一人山田顕義は、「爰ニ民権家ノ力ヲ藉リテ、政府ノ處分ヲ破ラントスル者アリ」として大隈への敵意を示し、「今般ハ、維新來ノ大事件西南十年ノ役ノ類ニ非ズ、深ク心配ノ時ナリ」（三九四頁）と非常な危機感を表明していた。伊藤博文もこ

の日佐佐木に次のように重大な決意を表明した。

一方ノ民権家ヲ引込ミ、権力ヲ伸バサントスルノ徒ニ、深ク苦心ス、然レ共、博文ニ於テ死ヲ決シテモ、皇威ヲ汚シ政府ノ権ヲ失スル事ハ、萬々無之様維持スベシ、（三九五頁）

九月二十七日になると、事態はより切迫しているように見えた。

夜十時頃ヨリ、金子堅太郎・三好退蔵來リ、曰ク、過日來ノ事件ニ付、頗ル切迫セル事ナリ、其訳ハ、大隈・河野等頗ル党類相結ビ、粗暴民権家ノ勢力ヲ藉リテ、今度ノ機會ニ乗ジ、権力ヲ掌握セントス、又、沼間守一・福地源一郎等ノ類モ、此機會ニ投ジ、吾ガ平素ノ民権ヲ以テ侵入セント、最早還幸モ近日ニ付、頻リニ周旋セル由、今日岩崎小次郎ヘ小松彰ヨリ内話ニ、今度大隈ノ策モ大ニ行ハレ、誰ニモ同意ナリ、岩崎君ニモ大ニ盡力アレト、畢竟、小松ハ岩崎ガ大隈ノ指令ヲ受ケタル一人ト思フテナリ、然ルニ、岩崎ハ中正論ニ付、同意ヲ表セズ、夫ヨリ右切迫ノ事情ヲ同志ニ相談シテ、此ノ上ハ同主義ノ老輩ヲ煩サントテ、金子・三好両人來リ、又、岩崎・嶋田両人ハ谷干城方ニ向ヘリト、依ツテ、明日午後、谷氏ニ相會シ度トノ事ナリ、其中正ノ主義ハ萬々同意ナリ、其先キノ運ビハ、尚、明日相談スベシト、世談数刻、十一時半頃、又岩崎・島田両人モ來ル、谷ニテ愈明日會スルヲ約ス、（三九八～九頁）

金子と三好が、陰謀実現の時期が迫ったと夜分佐佐木宅に押し掛け、中正党の結成につながる、翌日の谷干城

宅での会合を約束した。翌二十八日に、佐佐木や谷干城などの保守派政治家と金子堅太郎以下の中堅官僚により、「行政官ノ不當ノ施行ヲ論辯」すると同時に、「政府ヲ輔翼シ、急激論者ヲ抑制」（四〇〇頁）するのを任とする中正党が結成されたが、実際に結成の主導権を取ったのは佐佐木や谷に情報を提供し説得工作を続けた金子等官僚であり、特に直接のきっかけとなったのは、大隈一派の権力掌握の危険を警告する金子の情報であった。

十月一日に金子は、福沢は陰謀実現を見越して国会議員の多数派工作に乗り出していると、次のように報じている。

金子堅太郎ノ談ニ、一昨日來、追々來客アリテ、風説ヲ聞クニ、最早福澤連ハ、愈國會ハ不遠設立ニ付、議員ヲ同主義者ノ多数ヲ得ント、大ニ周旋セルニ、三菱會社ヨリ、月給三百圓ノ議員五名ハ賄フトノコト也、然レ共、各県ノ處覚束ナキトテ、福澤大ニ眞宗ヲ押立テ、本願寺ヨリ各懸ニ説諭、同主義ヲ拡張スル策ノ由、三菱會社ノ斯ク迄心配スルハ、同社モ政府ヨリ貳百萬圓程ノ負債アリ、且、十年ノ変事ニ際シ、十一艘ノ官船ヲ渡シ置キタル等ノ事ニテ、若シ國會論ニ依リテハ、右金額等、速ニ返納ノ説モアルベシ、故ニ福澤抔ト相計リテ、同主義ノ議員ノ多数ヲ求ムルニ切ナル由、皆憂國ニ非ズ、利己主義ニテ、愛金論者トイヘリ、（四二〇頁）

この場合は、直接の証人の名は出さず、来客の風説を伝えるという形式である。それでも、具体的な数字を出して、三菱会社や本願寺との関係を述べ、話に信憑性を与えている。

十月の段階になると政府の危機感は益々高まり、五日には土方久元が佐佐木に、「民権ノ分ラヌ者ガ必ズ暗殺

ヲ初ムベシト、警視庁ニテ大ニ注意スベキ也ト」（四三四頁）と、暗殺の恐れさえ口にするようになっていた。佐佐木も次のような感想を漏らしている。

今日ノ景況、相互ニ相疑ヒ、在官中ニテモ、誰ハ民権党ナリ、誰レハ薩方ナリ、長ナリト、實ニ敵味方不相分、狐疑甚敷、古ヨリ如此ノ時勢ハ如此ナルベシ、此ノ時ニ當ツテ私利ヲ営マズ、確乎ト正立シテ動カヌ者、幾人カアルト、後人、明治十四年、殊ニ此頃ノ景況ハ、十年西南ノ騒乱ヨリ危嶮タル事ヲ想フベシ、（四三五頁）

このような危機感の高まりと共に、政変は、いよいよ最終段階に到達した。十月十二日には、大隈罷免の決定の経緯を次のように記している。

岩公ヨリ草々ノ内談ニ、昨夜御内決ノ節ニ、薩長ニテ団結シテ大隈ヲ退ケル手段ニテハ無キヤト御疑念被為遊候間、決シテ左ナク、大隈ノ事件ハ、佐々木・土方・河田・安場等ノ正義論者ヨリモ、充分承リ候事相違無之事ト申上タルコトニ付、若シ御直ニ其邊御下問ノ節ハ、不都合ナキ様頼入ルトノ事也、高行曰ク、勿論大隈ノ不埒ハ、充分申上タル通リニ有之候（四五六頁）

大隈罷免を内決する場で、天皇が大隈陰謀は薩長による大隈追放の口実ではないかと難色を示した時に、岩倉が佐佐木等の正義論者も全員同意見であると述べて、許可を得たのであった。大隈追放を決定する場において、

佐佐木等による中正党の結成や、それにつながる大隈陰謀に関する金子等による執拗な説得工作が決定的な役割を果たしたことになる。翌十三日には、この事情を天皇自身が次のように佐佐木に語っている。

十一日東京著、即日大臣・参議一同ニテ、大隈免官無之テハ政府ノ御趣旨不相立ト申立テタリ、一體、太政大臣ハ能々相心得タルモ、右大臣モ六日頃帰京ニ付、初メテ事情ヲ心得タル事ナリ、左大臣ハ帰京ニテ、是亦初メテ事情ヲ詳ニセリ、右ノ次第ニ付、若シ哉、薩長参議ニテ結合シテ、大隈ヲ退ケルノ議ナラン歟ト疑惑セル故、大隈ノ儀確証[3]アリ哉ト尋ネタルニ、只今確証御取調ト相成リ候テハ不容易、其ノ事柄ハ、福澤門人等初メ其他ヨリ、十分相分リ居リ候事ニテ、既ニ薩長ノ参議而已ナラズ、平素正義論家モ、悉皆其邊ハ相心得、憤懣仕候事ニ付、若シ薩長ノ事御疑念被為遊候テハ、忽チ内閣モ破裂仕候間、何分御許容相成度トノ事ニ付、如此事情分明ナレバ許容スベシト、（四六〇頁）

このように大隈とその配下の官僚の罷免が決定され、十月十四日には明治二十三年の国会開会を約する詔勅が出され明治十四年の政変となった。

以上紹介してきたように、『保古飛呂比』における金子堅太郎の大隈陰謀に関する報告は質量とも突出している。その情報は、直接的で具体的であり、佐佐木に陰謀の脅威を実感させて、最終的には中正党を結成させる最大の要因となった。次の章では、この金子の報告の内容を詳しく検討することにする。

二、金子の報告の特徴

『保古飛呂比』における、金子堅太郎の大隈陰謀に関する報告には、顕著ないくつかの特徴がある。最も注目すべき第一の点は、他の者が報じるものと異なり、伝聞ではないということである。最初に佐佐木に大隈陰謀説を知らせた伊藤博文の内話も伝聞であった。

それに対して、九月二十四日に金子が初めて佐佐木の元を訪れて、大隈の陰謀について報告した時には、大隈配下の官僚の石橋や中島等が、次のように述べたと証言したのである。薩長の私論を破る時は来た、佐賀の者は団結して政党を結成する、佐賀だけでは不足なので各県の同志と結合する、土佐は板垣でまとまり、九州へは矢野が周旋に当たっている、三菱会社と福沢の筋とも結合するはずである、と。

以上のように、陰謀の当事者である現職の官僚達が口にした行動計画を、金子は、自分達同志が直接に聞いたと断言しているのである。他の多くの人間達が挙げる大隈陰謀の根拠は、状況証拠や、疑惑に基づく推測にすぎない。この金子の言葉は、記録に残っている限り、大隈の陰謀の存在を証明する最も決定的な証言である。もし裁判が行われるとすれば、直接に陰謀の計画を聞いた金子等は、大隈一派の有罪を証明する最重要証人である。

その後においても、大隈陰謀に関する金子の情報は、陰謀当事者達の行動を具体的に伝えていること、そしてその情報源を明確に特定していることで一貫している。二十六日には、福沢が大隈陰謀の起点となった建白書を自分が書いたと、門下生に得意そうに話したと報じている。直接に明言はされてはいないが、その場にいた門下生から聞いた話であることは明白である。

二十七日には、金子と三好が、陰謀実現の時期が迫ったと夜分佐佐木宅に押し掛け、中正党の結成につながる、翌日の谷干城宅での会合を約束した。金子が事態切迫の証拠として挙げたのが、その場にはいない同志岩崎が、陰謀一味の小松彰から聞いたという言葉であった。

十月一日の、福沢は陰謀実現を見こして国会議員の多数派工作に乗り出しているという報告は、「風説」であるとは断っているが、福沢の行動が監視しているかのように具体的に紹介され、情報源も一昨日来訪した客であると特定している。

このように、金子による佐佐木に対する大隈陰謀報告は、単なる情報の提供ではなく、陰謀の告発ないしは陰謀一味に関する密告と形容するのがふさわしい行動であった。

金子による大隈陰謀の情報の第二の特徴は、その中心的な内容が明白な虚偽だと言うことである。彼が証言した大隈配下の官僚の陰謀計画が事実なら、福沢との単なる類縁故にその門弟達が罷免されたのだから、陰謀当事者の彼等は重い処罰を受けてしかるべきである。大隈陰謀説の起点となった大隈の建白書に関する報告も、中正党結成のきっかけとなった陰謀切迫の情報も真実ではない。そのことは『保古飛呂比』そのものに露呈している。

金子は、「福澤ハ、大隈ノ顧問ナレバ、今春カ、國會ヲ速ニ設立ノ建白書ヲ福澤ニ綴ラセタリ、福澤ハ、大隈ヲ籠絡セル心持ニテ、其事ヲ密ニ門下ニ話」（三九二頁）したと報告していた。ところが、彼は十月八日になって唐突に、「大隈ノ建白ハ、愈矢野文雄・小野梓ノ両人ニテ成リタル由」（四四四頁）と佐佐木に告げているのである。これは矢野の回想とも一致する正しい情報である。この建白の作者が誰であるかは、大隈陰謀説全体に重大な意義を持つ[4]。何故この時になって、金子は前の報告が虚偽であったと自供するような報告をしたのであろうか。その理由は、この時期に、東京を離れていた有栖川宮や元田永孚や岩倉具視など、大隈の建白の現場近くにいた

人間が次々と帰京して、いずれも大隈の建白の重大性を否定するような証言をしていたからであると思われる。[5] 大隈の建白事件を元に陰謀説を吹聴していた井上毅が、この問題をさらに追及されれば面倒と考えて、事実を明かして建白事件の重要性を引き下げようとしたのだと思われる。[6] 井上毅が、真実を把握した上で、偽情報を流していたからこそできる芸当である。

九月二十七日に、金子と三好が、陰謀実現の時期が迫ったと夜分佐佐木宅に押し掛けて、翌日に中正党の結成が実現した。金子が事態切迫の証拠として挙げたのが、陰謀一味の小松彰から聞いたという言葉であった。しかしながら、佐佐木が伝えたこの小松の言葉に関して、中正党に参加したが、結成の会合に参加できなかった土方久元から強い疑問が表明された。小松は土方の古くからの知人であり、その前日に土方が小松から聞いた言葉は、事態を憂えるもので、金子の報じるものと全く相違するものであった（四〇一～二頁）。金子か、土方のどちらかが嘘をついていることになるが、土方に嘘をつく動機はない。

このように、報告の核心部さえもが明白な虚偽であるということは、金子の報告全体が、意図的な虚構であったと判断せざるを得ない。しかも、彼の陰謀に関する情報が、常に根拠を示しての陰謀の一味の人間の告発という性格を持っていたことを考慮すれば、彼の大隈陰謀の報告は、人を罪に陥れるための偽証、もしくは、人の名誉と信用を傷つけるための中傷讒言であったと断ぜざるを得ない。

金子堅太郎の大隈陰謀に関する報告において、注目すべき第三の点は、伊藤博文などの政治家が信じ込んでいた大隈陰謀説と細部まで一致しており、それを具体的証言によって裏付けていることであった。政治家達が信じ込んでいる大隈陰謀説とは、次のようなものである。大隈は、福沢などの民権派と組んで政権の奪取を企てた、その証拠は三月の早期国会開設の建白で、その真の作者は福沢である、開拓使払下反対運動も大隈の陰謀であり、

福沢は民間の反対運動を煽り、三菱などから資金を得て政権奪取を計画している、と。

金子の報告は、明らかに伝聞であるこれらの政治家達の陰謀説を構成する個々の要素を、直接の具体的な証言で裏付けていることになる。福沢自身が大隈の建白を書いたと述べるのを福沢の門人が聞いたと、金子は報じた。金子等同志は大隈配下の書記官が次のように公言したのを聞いたと証言した。薩長を倒すために佐賀の者は団結する、それでは不足なので高知の板垣等の各県の民権派と連絡し、矢野文雄は九州で工作している、三菱と提携し、福沢も助力している、と。その他の金子の報告も、三菱からの金の流れの具体的な情報や、陰謀一味の個々の人間の動向や、互いの連絡の様子など、まさに進行中の陰謀の現場の報告という性格を持っている。そして最終的には、今度は大隈の策が大いに行われるという小松の言葉を証拠に、陰謀実現の危機が切迫したと佐佐木に迫り、ついには中正党の成立を実現させた。

このように、金子の報告は、薩長の政治家達が信じ込んでいる大隈陰謀説に対して、薩長勢力とは距離を置いた、官僚という現場に近い立場から、より具体的な証拠を提示して、強力な傍証を提供するものであった。

それでは、その政治家達はどの様にして、大隈陰謀説を信じ込むようになったのであろうか。佐佐木に大隈陰謀を告げた伊藤博文の「肥後人ヨリ内通アリタリ」（三五二頁）という言葉の示すとおり、全く井上毅一人の工作によるものであった。その点は、前述の拙稿「明治十四年政変再考」で詳しく論じたので、要点のみを紹介する。明治十四年一月の段階で、伊藤、井上馨、大隈の三人の政治家と福沢の間で国会開設を前提にして協力の合意が成立した。しかし、三月に、大隈は、伊藤と井上馨に無断で国会開設の意見書を上奏した。この急進性に驚いた岩倉が、六月に井上毅に対案の検討を命じた。そして、六月二十七日には、伊藤は大隈の意見書を見たが、特別の反応を示さなかった。ところが六月三十日に、井上毅が伊藤を訪れて「種々密話」してから、伊藤の態度が急

変した。翌日になると伊藤は、強硬に辞意を表明するなど非常な憤慨を示した。大隈が訪れて陳謝に努めたが、伊藤は大隈の意見書は君権を民権に放棄するもので、左大臣と密奏するだけで国会を実現しようとしたのは、福沢の代理を務める軽率な愚挙だと罵倒した。伊藤にこのような確信を与えたものは、井上毅の「密話」以外あり得ない。すなわち、大隈の意見書提出は、福沢等民権派と組んだ一種の政権奪取の陰謀であったと井上毅が吹き込んだとしか思えない。

元来大隈に近い英国式立憲制度の主唱者で、先頭に立って新聞発行を福沢に依頼した井上馨が、七月二十二日に療養先の宮島まで押し掛けた井上毅の説得を受けた後に、伊藤に対して井上毅の主張を代弁するように、早期のドイツ式憲法の制定の必要を説くように態度を急変させた理由も、同様の陰謀説を聞かされそれを信じ込んだ結果と解釈する以外理解できない。この後も、井上毅は松方等薩摩派の参議にも説得工作を続けるが、ドイツ式憲法の必要を説く理由として、当然のごとく大隈陰謀説も吹き込んだと思われる。

七月の段階で、すでに伊藤や井上馨などの政治家は、井上毅の報告により、大隈と福沢による陰謀事件を信じ込んでいた。井上毅の機密漏洩によると思われる、八月以降に盛り上がる開拓使官有物払い下げに対する民権派の反政府運動の高揚は、すでに信じていた陰謀の確証を政治家に与えたにすぎない。

一見独立して無関係な、二つの情報源による大隈陰謀説に関する、これほどの一致は何を示すであろうか。通常は、大隈陰謀の実在を証明するものであると判断されるであろう。最初は、薩長による共謀と疑い、大隈の罷免に難色を示した天皇も、佐佐木等中正党も大隈陰謀を確信していると聞いたので、同意を与えたのであった。

しかしながら、前に述べたように、金子の報告の大きな特徴の一つはその中心的な主張が虚偽だということである。虚偽によって事実が証明されるということはあり得ない。それなのに、この二つの大隈陰謀説の筋書きが

細かいところまで一致しているのは、何を意味するだろうか。それは、この二つの陰謀説が実は根が一つであったとしか考えられない。すなわち、金子堅太郎の報じる大隈陰謀説は、本来この陰謀説を唱えていた井上毅によって、提供されていたとしか思えない。

実は、金子の佐佐木に対する密告そのものに、その真の作者が示されている。金子は、大隈が建白を福沢に書かせたと報告して、次のように続けている。「是レハ、薩長人ハ獨逸國ニ習ヒテ國憲ヲ立ルノ主義ナルヲ、大隈ハ英國ニヨツテ國憲ヲ立ルノ主義ナルニ付、福澤ヘ頼ミタル也、尤モ、内閣書記官ニモ福澤ニ勝ル位ノ人物モアレ共、大隈ハ、為ニスル所アル故ニ、殊更ニ福澤ニ依頼セル由、」（三九二頁）

薩長政府のドイツ主義に対する大隈福沢の英国モデルという対立の図式は、六月に岩倉から大隈の意見書を見せられた井上毅が、プロイセンモデルの憲法意見を提出することによって、井上毅自身が創作したものである。そのことを知っているのは岩倉、伊藤等ごく少数の政府首脳以外、井上毅だけなのである。大隈や、中堅官僚の金子が知るはずがない。それ故に、この報告の作者は井上毅以外にあり得ない。

その他にも、金子の大隈の陰謀に関する報告は、一味の個々の人間の動向などを、広範囲に、かつ具体的に把握していることを示している。その全てが虚偽であったわけではない。福沢が、開拓使払い下げ反対の為に門弟を各地に派遣して、遊説させていたことは事実であった。しかも、その資金が三菱から出ていたことも明らかにされている。金子の報告は、このように検証し得る断片的事実を基礎にした中傷だけに、一層信憑性が強く、一層効果的であった。中堅官僚にすぎない金子に、これほどの広範囲で具体的な情報が得られたとは思えない。政府首脳の絶対的信頼を得て、常に政府中枢にあって、重要機密にも近づくことができた井上毅のような人物なら可能であっただろう。

さらに、金子の報告には、福沢の身辺に関して、非常に内密の情報にも通じていた様子が窺える。金子と福沢を結ぶ線としては、馬場辰猪との親交ぐらいしかないが、馬場と金子が特に親しかったわけではない。一方、別な機会に詳しく論じるつもりであるが、井上毅には福沢身辺に強力な情報ルートを保持していた形跡があるのである。

金子は佐佐木とさほど深い関係ではなかったのに、佐佐木の持論を熟知していたかのように、その意を迎え佐佐木をすっかり信用させた。井上毅は、佐佐木とは余り交際を持たなかったが、佐佐木とは非常に近い関係にある元田永孚とは、同郷でもあり同志といえるほどの信頼関係で結ばれていた。その関係から、井上毅は佐佐木の保守的な信条もよく承知し、何を話せば喜び、どの様なことを言えば信用するかをよく知っていたに違いない。

この『保古飛呂比』における金子は、驚くほど積極的であり、むしろ上司の佐佐木を自信あふれる言動によってリードしている。ところが、この政変期以外に、金子にこのような行動の例は全く見られない。後の時期の金子の佐佐木に対する態度は、卑屈とも言えるほどの恭しさである。そのような金子こそ本来の姿であり、この時期の金子は自分自身の発意ではなく、別の人間の指示を受けて動いていたとしか思えない。その人間とは井上毅である。井上毅こそ、確信に満ちた言動によって、上司の政治家達を動かして、組織化する見識と実行力を有していた。明治十四年の六月から七月にかけての政治家に対する説得工作や、翌明治十五年の条約改正交渉における、内地開放案阻止における活動など、井上毅にはそのような実例が少なくない。金子堅太郎の佐佐木高行に対する大隈陰謀に関する報告は、実はその出所が井上毅であり、井上毅の指示を受けた行動であったと思われるのである。

金子の大隈陰謀の報告が、実は井上毅の報告と同一であるということは、この章の冒頭で指摘した金子の報告

の二つの特徴、すなわち虚構であり中傷讒言であったという性質も、当然、井上毅の政治家への言論工作へも当てはまる。大隈陰謀が実証されたことはない。金子の佐佐木への報告は「密話」と分類される性質のものであった。佐佐木が類のないほどに忠実な記録者であったので、金子は悪質な中傷讒言の証拠を残した。一方井上毅が相手にした政治家達は、誰も佐佐木ほどには筆まめではなかったので、その「密話」の内容は憶測するしかない。しかし、井上毅の説得を受けた政治家は、態度を急変させているのである。井上毅の意見書や書簡が示すような単なる暗示や示唆にとどまらず、彼の「密話」も金子のものと同様に、虚偽に基づいた、断定的な中傷讒言であったと推測するのが自然である。

金子は井上毅とは「肝胆相照らす仲」[7]であった。『保古飛呂比』において、陰謀に関する虚偽の情報による密告という役割は、金子一人が実行している。後になって、金子が井上毅と共に憲法起草者の一人となるという特別の抜擢を受けたのは、この佐佐木に対する危険な工作への報酬ではなかったか。

三、井上毅の役割

『保古飛呂比』によると、金子は佐佐木の元を訪れ、大隈陰謀に関する具体的報告により、佐佐木の大隈への敵意と危機感を高め、最終的に中正党を結成するに至った。金子の情報と働きかけによって、保守派の非薩長派の政治家と中堅官僚からなる中正党が結成されたのである。保守派の政治家が個別に動くのでなく、大隈への敵意によって団結することにより、一つの政治集団として薩長の政治家達にとっても無視できない政治力となった。それは、単に大隈追放において決定的な役割を果たしただけでなく、政府内の保守派の比重を格段に強化するこ

とになった。

まさに、このような結果をもたらすために、井上毅の意を受けて、金子は佐佐木を訪れて入説活動を開始したと思われるのであった。金子が最初に、佐佐木を訪れた時に、彼は自分の同志として自分と同じ幾人かの中堅官僚の名を挙げた。それらの、一人か二人が、佐佐木のみならず、同時に谷干城の元も訪れて、同様な説得工作を開始していた。これは、明らかに、政府内の非薩長の保守派政治家を組織して、一つの政治勢力として結集させようという意図を持った、計画的な行動であり、組織的工作であった。そのような行動が、金子以下中堅官僚の知恵だけで、実行できたとは思えない。このような長期的展望に立つ、大胆な政治的戦略を組み立て実行することができるのは、井上毅以外にあり得ない。[8]

井上毅による金子等を使った保守派政治家の組織化は、民権派に対抗する全国的な保守勢力の結集と組織化という、より大きな政治的戦略の一環であった。井上毅は、地方レベルにおいても佐佐木も含む保守派の組織化をも企てていたことが、『保古飛呂比』に窺える。七月八日に、熊本の佐々友房が、突然佐佐木高行を訪問した(三一三頁)。そして、佐佐木と同じ高知出身の板垣退助の悪口を言って、すっかり反自由民権の佐佐木の信用を獲得した。そして民権運動の脅威を述べて、地元九州における民権派とあくまで闘う覚悟を表明して、常に地元高知の民権派の動向を憂慮している佐佐木とすっかり意気投合した。この後、佐々は同じく高知出身の谷干城の元を訪れ、同様に信頼を獲得した(三一六頁)。この出会いをきっかけに、熊本と、高知において民権派に対抗する保守勢力の団結が進むことになり、両県の勢力は連絡を取っていくことになる過程が、『保古飛呂比』に記録されている。佐々友房は後に熊本紫溟会の代表となったが、井上毅の信用が厚く、重要な事件がある度に井上毅の周辺に現れている。この佐々の突然の佐佐木訪問も、井上毅の指示によるものと考えられる。

このような地方レベルの保守派勢力の結集も、政変には大きな役割を果たした。九月の三十日に、熊本の保守派結集に当たっていた安場保和は、熊本と高知の保守派団結の報告を聞いた岩倉が、薩長以外のこのような勢力の支持を得て頼もしいと述べたと佐佐木に伝えていた（四〇九頁）。そして、十月八日には、岩倉自身が佐佐木に向かって、事件解決への決意を表明した際に次のように述べている。「維新ノ際ニ立戻リタル心ニテ、共ニ盡力可致、就テハ、熊本ニモ安場ノ同志団結セル由、高知モ各々方ノ盡力ニテ、正義党団結ノ由、大ニ力ヲ得タリ」（四四四頁）。

すなわち全国の民権派を敵に回すような政変の政治決定を下す際に、このような地方レベルの保守派の政治勢力の支持が、政府首脳の大きな支えとなっていたのである。このように重大な政治問題で、中央と地方レベルで保守派の支持に依拠することは、国内の政治状況の保守と革新の二極化を推進し、政府の方向を大幅に右寄りに動かす結果を生みだした。そして、そのことこそが、井上毅が最初から意図した結果であると思われる。

七月十二日に井上毅は書簡で、伊藤博文に早急にプロイセン風の憲法を制定することを要求して次のように述べている。[9]

普魯西風の憲法を行ふ事は、如此風潮の中に於て至難の勢なるへしといえとも、今日に在ては猶是を挙行し、多数を得、以て成功に至るべし、何となれは英国風の憲法論未た深く人心に固結するに至らずして、地方の士族中、王室維持の思想、猶其餘瀝を存するもの、必ず過半に居れはなり、若し今を失ふて因循に付し、二三年の後に至らは、天下の人心既に胸に成竹ありて百方弁説すとも挽回に難く、政党の多数全く彼れに属して此れに属せず、政府より提出せる憲法の成案は輿論の唾棄する所となり、而して民間の私擬憲法終に全勝

を占むるに至るへし、故に今日憲法制定の挙は寧ろ早きに失ふも、其遅きに失ふべからず、

この時には、伊藤博文は井上毅のこの主張には同調しなかった。この七月の初めの段階では、開拓使問題は政治の地平線上に現れる前であり、もちろん民間の反対運動など影も形も存在しなかった。それにも拘わらずに、井上毅は、まるで反政府運動の高揚を予期しているがごとくに、佐々などを使い「地方の士族」の組織化に着手していたのである。

事件の発生前にその対策に着手するような、この奇妙な手回しのよさも、開拓使官有物払下げに関する機密漏洩が、井上毅によるものと疑う大きな理由の一つである。この問題は重要な政府の機密であり、佐佐木のような高官でさえも、新聞が騒ぎ出して初めて知ったのである。機密の漏洩は、政府の中枢部の人間が関わっていたとしか考えられない。大隈陰謀説を信じていた伊藤博文等薩長の政治家は、大隈の仕業と確信していた。しかし、大隈はそのことを否定したし、大隈の関与を示す証拠も存在しない。けれども、後代の研究者達も、機密を暴露したのが後に改進党系となる新聞であるので、大隈派の関与を当然視している。しかし、大隈陰謀が事実である場合だけ、大隈が機密を漏洩する理由がある。大隈陰謀が虚構である場合は、何のメリットもないのである。[10] 大隈には、他に機密漏洩を疑われたような前歴もない。

一方、井上毅には、機密を漏洩する理由があった。前に記したように、この開拓使反対運動の高揚があって初めて、政府の危機感を高め政変に帰結して、当初から井上毅が主張していたような、政府が保守勢力に依拠してプロイセン型憲法を採用して、英国風憲法を主張する民権派と対立するという政治構造が確立したのである。井上毅の場合には、この事件以外にも、その周辺に不審な機密漏洩の事例が少なくない。けれども、井上毅のよう

に政府の忠実有能な官僚として知られた人間が、政府の重要機密を漏洩して反政府派を活気づけ、政府の存立さえ危うくしかねないような、きわどい行動に出るだろうかという疑問が当然生じる。

しかし、井上毅は明治二十年の井上馨の条約改正反対運動において、政府の重要機密を漏洩して反対運動を煽ったという証拠があるのである。しかも、この反対運動の起点となった井上毅によるボアソナードの反対意見の伊藤への報告も、大胆な虚構であるという点で、大隈意見書に関する井上毅の伊藤への報告と強い類似性を持っている。

明治十四年政変における井上毅の行動を、間接的に照らし出す極めて類似した事件として、この条約改正反対運動における井上毅の行動を紹介することは極めて有益であると思われる。そこで、以下に、この問題を扱った拙稿「ボアソナード意見書の再検討」[11]を中心に、井上馨の条約改正阻止に井上毅が果たした役割を簡単に紹介する。

井上馨が長い歳月をかけて実現を目指した不平等条約の改正交渉は、世論の圧倒的な反対の前に惨めに失敗した。世論のそのような反対の声を盛り上げるのに、最も大きな役割を果たしたのは、御雇外国人のフランス人法律学者のボアソナードの反対意見であった。彼の意見の中で最も強く世論を動かしたのは、新条約に対する「外国人裁判官の任用は独立国にあるまじき、半植民地のエジプト並の屈辱である」という主張であった。ボアソナードのような誰もが認める高い学識の人間が、条約改正に関するこのような刺激的な意見を述べたのであるから、彼の意見書を見た人間が、井上馨の条約改正は屈辱的なものと信じて、反対に立ち上がったのは当然であった。

このボアソナードの意見書は重大な機密であるにも拘わらずに、新聞や民間に漏洩して、非合法文書の形で広

く流布した。同時に流された鹿鳴館を中心とする政府高官の性的スキャンダルも、井上馨の主導する条約改正交渉や、欧化政策に対する世論の反感を高めて、民間では大同団結運動を促し、三大建白運動で政府への攻撃を強め、政府内においても井上馨に対する批判の声が高まった。井上馨は条約改正の中止を余儀なくされ、外務大臣の地位も辞職した。それでも収まらない民間の反政府運動に対して、政府は最終的には保安条例という高圧的手段で鎮圧するに至ったのであった。

このような大騒動に発展した条約改正反対運動を引き起こした、ボアソナードの意見書の中心的論点は、外国人裁判官の任用は日本をエジプト並にする屈辱であるという主張であった。エジプト並と決めつけることは、条約改正が屈辱的なことを人心に直接分かり易く訴える実に効果的な方法であった。この後以降、外国人裁判官の任用は屈辱条約の象徴としてタブーとなってしまった。後の大隈による条約改正は、井上馨のものよりかなり前進したものではあったが、少数の外国人裁判官の任用が明らかになると、またもや強硬な反対運動を引き起こした。そして、大隈は爆弾を投げつけられ、文字通り失脚して条約改正は失敗した。

しかしながら、ボアソナードは、外国人裁判官の任用はエジプト並の屈辱とは考えていなかったという明白な証拠がある。それどころか、彼は条約改正を実現するためには外国人裁判官の任用は有益だとさえ述べていたのである。[12] 外国人判事裁判官任用をエジプト並の屈辱であると一貫して主張していたのは、ボアソナードの意見を伊藤博文に取り次いだことになっている、井上毅その人なのである。[13] 井上毅が、ボアソナードの外国人裁判官に対する意見を誤解するはずはないのである。ボアソナードが外国人裁判官任用に肯定的な意見を表明したのは、井上毅が外国人裁判官任用はエジプト並の屈辱であるという持論を表明して、それに対するボアソナードの意見を求めた諮問に対する回答においてなのである。

この回答文において、ボアソナードは、外国人裁判官任用は日本をエジプト並にする屈辱であるという井上毅の意見を明白に否定している。その事実を誰よりも知っている井上毅は、それでも外国人裁判官の任用はエジプト並の屈辱であるとする条約改正反対意見を、ボアソナードのものとして広く流布させたのであった。ある人間に関して、その人間が言いそうもなく、言いもしなかった刺激的な言葉を口にしたと報告して、強い感情的反応を引き起こしたのであった。大隈陰謀説の流布においても福沢や大隈系官僚に関して効果的に使用された手法である。

ボアソナードは一貫して井上毅の能力と人間性を高く評価して、信頼を置いていた。そのボアソナードについても、このような事実と正反対の報告をした井上毅が、福沢のように自分の敵と考えた人間については、どの様な虚偽の申し立てをするのも辞さないであろうことは当然予想される。井上毅の福沢に関する「密話」の内容は、金子の佐佐木への報告同様に大胆な虚構であったことは、この点からも推察される。

井上毅には、さらにこのボアソナード意見書を漏洩したという証拠もある。[14] このボアソナード意見書は、元来総理大臣の伊藤博文のみに報告することになっていた。もし漏洩すれば、政府攻撃の格好の武器となることが確実な重要機密文書であった。ところが、それはまもなく、野党系新聞などに広く漏洩流布することになってしまった。勿論、井上毅自身が関わっていなければ不可能な事態で、井上毅も抽象的ながら自分が漏洩したことを認めている。[15]

さらに、このボアソナードの意見書と殆ど同時に広まった、政府高官の鹿鳴館を舞台とする性的醜聞の流布も、井上毅の仕業である可能性が大きい。四年も前から出来上がっている鹿鳴館に関わる醜聞が、何故この時期に噴き出したのか。この醜聞は、井上馨の欧化政策を積極的に支持した人間を正確に狙い撃ちしている。この醜聞の

出所は、その内容の驚くほどの卑猥さにも拘わらず、決して無知無識の大衆ではあり得ない。政府の内情に通じ、欧化政策に強い敵意を持つ人間である。井上毅は何通もの意見書において、井上馨の欧化政策を亡国の政策であると強く批判して敵意を示している。[16]

事実無根の大隈陰謀説を広めて大隈を中傷した井上毅が、事実無根の醜聞を広めて井上馨を中傷したと想定しても不自然ではない。大隈陰謀説が決して客観的な証拠で実証されなかったように、鹿鳴館における醜聞も決して実証されることはなかった。それでも、大隈と井上馨の名声と信用を傷つけ、二人を失脚に導く大きな武器となった。

以上のように井上毅の条約改正反対運動における、明白な虚偽の報告による問題の捏造、重大な政府の機密の漏洩による反政府運動の煽動などの行動を見る時に、彼が明治十四年政変においても同様な行動に出たと推論することは自然であろう。このような虚偽の争点の提出による不和の醸成、大衆の感情を煽る機密漏洩の行為は、「目的を達成するには、激しい軋轢を引き起こす必要がある。そのためには、火を焚きつける工夫が第一だ」[17]とする彼の行動哲学から、当然生じるものである。

井上毅は明治十四年政変において、明確な政治的展望と目標を持ち、その目的のためには手段を選ばなかった。『保古飛呂比』の明治十四年政変関係の記事において、主導的な役割を果たしたのは金子堅太郎であり、井上毅の名前は全く出てこない。[18] しかしながら、この論文で検討してきたように、その金子の活動は明らかに井上毅によって指導され指示されたものである。

『保古飛呂比』の政変関係記事が示す、政府内部の非薩長系の保守派の政治家と官僚による中正党の結成、熊本と高知のような地方における熊本紫溟会のような保守的政治結社の結成と各地方間の連絡と団結のような政治

的な達成も、実は表に現れなかった井上毅の陰の指導によるものと推測される。それが、八月以降表舞台からは全く姿を消した彼の行動を説明する。そして、それこそ、世間に名を売る者を軽蔑して、「難ヲ冒シ、険ヲ衝キ、冥々之間ニ大勢ヲ挽回スル」[19]者こそ、真成の憂国者であるという井上毅の隠密の活動を重視する価値観と一致する。

『保古飛呂比』の明治十四年政変関係の記事には、井上毅は全く姿を現さない。しかし忠実に記録された、その代理の金子堅太郎等の行動を詳しく分析することにより、資料には残っていない井上毅の政変における具体的行動の全容を推理する、大きな手がかりを与えてくれるのである。そして、金子の報告の虚構性は、後の時代の方向を決定したこの重大事件が、虚偽によって引き起こされたことを示しているのである。

おわりに

政変後、一ヶ月が経った十一月十五日の『保古飛呂比』の記事に、政変によって何が変化したのかを象徴的に示す記事がある。御陪食の席で、岩倉具視が最近の演説に過激なものが多く不安であると述べ、それには加藤弘之の『国体新論』などにも責任があるという話題になった。何故このような過激な本が今まで不問に付されて来たのかという疑問が出されて、出版当時島津久光が大いに問題にしたけれど誰も頓着しなかったと岩倉が言った。そして佐佐木も「其節ノ風潮ハ、今日ト違ヒテ、新論抔ヲ兎ヤ角論ズレバ、頑固人ト申シ做ス位也、島津ノ議論ハ、善悪共頑固論ト押シ附ケタル事ト想像スル也、」（五三八頁）と述べた。これに対して、加藤は大学総理でありこの書をそのまま放置できないが、今更責めるわけにもいかないので、本人から絶版を申し立てるよう取り計

らうべきであるとの決定がなされた。

有名な加藤弘之の『国体新論』絶版事件は、このように宮中の議論によって決定されたのである。以前は「頑固論」とされて、誰も頓着するものがなかった島津久光の主張こそが、政府の正論として通用するようになったのである。明治政府きっての保守反動として突出していた島津久光の思想が、政府の正統思想となったのである。これほど、政変による政府の思想の変化を端的に示す例はないであろう。

政変前であるならば、このような頑固論に反対したであろう開明派の代表の井上馨は、政変後の十月二十八日に佐佐木に取り入るように福沢の悪口を言っている（五〇四頁）。どちらが優位にあるかは明白であった。政治家がこのような変化を見せるならば、その顔色を窺わねばならぬ官僚達の気風も一変せざるを得ない。佐佐木は十二月二十三日に、地方官会議に集まった地方官達が、最も自由主義的な官僚さえも全く思想を転じたと観察して、かつては自分を「頑固視」していた田邊高知県令が大いに後悔した様子で自分達に弁解するのは笑止であると満足そうに述懐している（五七五～六頁）。

明治十四年政変とは、それを引き起こした井上毅が、政変後の政府の取るべき方向を説いた「人心教導意見」で「彼レ（福沢）ノ為ル所ニ反スルノミ」[20]と断言したように、政府内の福沢的要素を追放して、政府内の「頑固」思想が主役となった、一種の思想的反動革命であった。

注

（1）『年報近代日本研究18』（山川出版社、一九九六年）。

（2）『井上毅傳資料篇第一』（國學院大學図書館、一九六六年）二四八～二五一頁。

(3) 驚くべきことに、大隈陰謀に関する確証はあるのかと天皇に問われて、福沢門人の動向云々などという曖昧な答えのみで、政治家達は明確な証拠を示すことができなかった。薩長参議だけでなく、佐佐木等の正義派も陰謀を確信していると、単に心証を表明したにすぎなかった。何故、彼等は、大隈陰謀説のそもそもの発端となった、福沢の手になる大隈の国会開設の秘密建白事件を挙げなかったのか。何故、金子堅太郎があれほど詳細明確に証言した、大隈麾下の官僚達の陰謀計画を報告しなかったのか。これらの政治家達に陰謀説を吹き込み、彼等を陰で操った井上毅が、いずれの場合も根拠のない虚構であることを誰よりも知っていたからであろう。

(4) 大隈の国会開設の秘密の建白が、井上毅が「十万ノ精兵ヲ引テ無人ノ野ニ行クニ均シ」(『井上毅傳資料篇第四』(國學院大學図書館、一九七一年)四七頁)と形容して、民権運動の首領であると位置づけた外部の福沢諭吉の手になったものであったという事実こそが、大隈が在野の民権派と結託した何よりの証拠とされたのである。それ故に、伊藤博文も、大隈が参議の身でありながら、民間の「福沢如キ者ノ代理」(四三一頁)を務めたと罵倒したのであった。大隈の建白の作者が、属僚であった矢野や小野であったとすれば、陰謀説全体の基礎が覆される。

(5) 左大臣の有栖川宮は次のように説明していた、「大隈ハ根本建白ノ體ニモナク、又、充分見込ト申ス程ニハナク、只口上ニテ凡ソヲ申上候處ヲ書取リ、参議ヘハ密ニテ奏聞シ呉レヨト申出デタリ、然ルヲ、右大臣ガ伊藤ニ見セタルヨリ、大ニ議論起リタル事ナレバ、此ノ事件ハ、左程ノ事柄ニハ無之トノ事也云々ト」(四五一頁)。この回想は、大隈自身の説明とも一致する。意見書上奏当時天皇の近くにいて、十月になって箱根の養生先から帰った元田も、「大隈ノ建白ハ、聖上ニモ最初ヨリ御信用ハ無之、参議建白中、大木ノ分ヲ第一御信用ナリ、次ニ伊藤ナリ」(四三六頁)と述べて、この問題を重視していなかった。最初に井上毅に大隈の意見書を見せ、対案を検討させた岩倉自身も、「甚ダ迂遠ナル」(四四二頁)と評されるほど、この問題に対する危機感は薄かった。

(6) 大隈陰謀説の起点となった、大隈密奏事件は、もしそれが井上毅の主張するように一種の政権横領陰謀であったならば、大隈単独では不可能で、左大臣の有栖川宮が何らかの形で加担したことが前提になる。それ

故に、陰謀説を信じ込んでいた、長州参議の山県有朋と山田顕義は、この問題で有栖川宮を問詰して宮を怒らせていた（四八三頁）。

（7）山室信一『法制官僚の時代』（木鐸社、一九八四年）三三九頁。

（8）明治十四年七月の段階における、大隈に対抗させるための、井上毅による薩長の政治家の団結工作は、伊藤博文の指示ではなく井上毅自身の考えと意志による行動である。「属僚の糾合は伊藤の依頼よりも井上毅の勧誘なるべし」と三宅雪嶺も述べている（『同時代史』第二巻（岩波書店）一四〇頁）。

（9）前掲『井上毅傳資料篇第四』（一九七一年）四七～四八頁。

（10）矢野文雄は次のように述べている、「我々の当時の考えは、開拓使事件ぐらいのところではない。なるべく薩長有力者との間柄を円滑にして、立憲制度の樹立の便にしたいと思っていたのである。」（『大隈侯昔日譚』（早稲田大学出版会）二二四頁）福沢の開拓使反対運動関与は、井上馨が国会開設の障害と述べていた保守派の薩摩参議の力を弱めようとの意図と思われる。それ故に、政変時には、「薩摩が憤った」と思ったのである。

（11）『史学雑誌』（史学会、二〇〇〇年）第一〇九編第三号。

（12）「外国人官仕ノ件ニ関スル答義」（『井上毅傳外編・近代日本法制史料集第八巻』（東京大学出版会、一九八六年）一二四～一二六頁）。

（13）「条約改正意見」（前掲『井上毅傳資料篇第一』）三〇四～三〇七頁、伊藤博文宛井上毅書簡（前掲『井上毅傳資料篇第四』）七二～七三頁。

（14）条約改正や欧化主義的風潮に不満を持っていた前田正名の使いとして、彼の意見書を持って井上毅の屋敷を訪れた高橋是清に対して、井上毅はボアソナード意見書を前田に見せてくれといって高橋に渡したのである。この時井上毅は、機密を守る為の配慮は何もしなかった（『高橋是清自伝上』（中央公論社、一九七六年）二七〇頁）。

（15）「ボアソナード宥免意見」（前掲『井上毅傳資料篇第一』五五〇～五五二頁）。

（16）明治十八年にフランス人の著書の翻訳という形式で出版された『奢是吾敵論』（前掲『井上毅傳資料篇第三』五三〇～五七〇頁）は、その内容から、実質上は井上毅の著書に近いと思われる。社会に流行する、豪

華な宴会や華麗な建築などの様々な贅沢を、亡国の元であると強く非難するもので、実際は井上馨の主導する欧化政策への攻撃の書である。明治十九年の「経済論」（同前、五七一～五八五頁）もやはり井上馨の欧化政策の批判であるが、経済に主題を絞っている。少年期にある日本では質素と朴直という美質を生かすべきで、壮年期から老年期にある西欧の多欲と腐敗をまねるべきではないと主張して、欧化政策の廃止を強く求めている。

（17）「兎角烈布軋轢ヲ引起不申候而者、好結果を得へからず存候、火ヲタキ付ル工夫専一存候」（前掲『井上毅傳資料篇第四』五九九頁）。大隈意見書に対する虚偽の報告、開拓使払い下げの漏洩、「ボアソナード意見書」の捏造と漏洩、鹿鳴館醜聞の流布など、全て、政界や世論に火をつけて、激しい軋轢を引き起こす結果になった。

（18）十月十五日の項に、政変そのものとは直接関係ない議論の中で一度だけ名前が言及（四七二頁）されているだけである。

（19）前掲『井上毅傳資料篇第四』五九三頁。

（20）前掲『井上毅傳資料篇第一』二四九頁。

（わたなべ　しゅんいち　福沢諭吉協会会員）